

【査読論文】

## 内発的发展論から考察する 2015 年ネパールゴルカ地震の再建復興過程

米川安寿<sup>1</sup>

<sup>1</sup> (公財) ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 研究戦略センター, 主任研究員

本稿は、2015 年に発生したネパールゴルカ地震の再建復興過程の事例を、社会学者鶴見和子の内発的发展論によって考察しようとするものである。現在、災害からの復興事業には地域の人々が主体的に参画できることが重要視されている。そこで地域の人々の主体性に関して、本稿ではネパールの伝統的建造物であるラニポカリの再建過程を事例として考察している。ラニポカリの再建では、当初政府が近代技術を利用した再建を計画したのに対し、住民側が建造物の伝統と歴史性を維持継承しようと声を上げて抗議を行った結果、住民側の意見が採用され、伝統的な様式での再建に成功している。その背景要因を考察した結果、ネパールでは、伝統を維持継承しようとする暮らしの型があり、日常的な地域活動によって、人々の間ではその意識が共有されていることが分かり、それが現代の SNS など媒体を通じて結集することで、近代技術ではなく伝統的な形式での再建の成功につながったことを明らかにした。

キーワード：ネパールゴルカ地震，復興，ラニポカリ，内発的发展論，社会変動，萃点

### 1. はじめに

本研究は、2015 年 4 月 25 日に発生したネパールゴルカ地震の復興過程について、社会学で地域発展の理論の一つとして位置づけられる内発的发展論の視点から研究することを目的とする。

ネパールは、インドとチベット自治区に挟まれた位置にある。国土の北部にかけてはヒマラヤ山脈の山岳地帯と南部には亜熱帯のタライ平野が広がり、自然環境の変化に富んだ国家である。ヒマラヤ造山帯に位置しているため、地震多発国である。2015 年に発生したネパールゴルカ地震（以下、今回の地震とする）は、マグニチュード 7.8 とされ、9000 人近い人々が亡くなった巨大地震であり、2025 年で地震から 10 年を迎えている。震源は、かつて王朝があったゴルカ郡（本震）、最大余震はシンドゥパルチョーク郡で発生し、ネパール全国に広く被害をもたらすと共に、伝統的建造物が多く盆地全体が世界遺産に登録されている首都カトマンズにも大きな被害をもたらした。ネパールは、長年にわた

って国連の分類により後発開発途上国とされてきたことから、社会経済発展のために政府開発援助や国際機関からの支援が続けられており、地震後も多くの外国援助がされた。そのためネパールのイメージは、発展のために外からの協力を必要とする国というイメージに偏っているという指摘がある<sup>1)</sup>。つまり自ら発展していく力が欠乏しており、外側からの支援による開発が必要という国際的な認識である。しかしネパールには、こうした尺度ではとらえられない歴史的に発展してきた社会があると考えられ、むしろ時間をかけて発展してきた社会構造が近代化の中で失われつつあるという懸念がネパール人自身の言論から散見される<sup>2),3)</sup>。このためネパールは復興において国や地域の豊かさや、伝統文化等の保護や維持の必要を見過ごさないようにする必要がある。本稿はこの点に鑑み、今回の地震後、特に首都カトマンズの中で、伝統的建造物をめぐって地域の人たちが主体的に動き、内発的に再建活動に参加したラニポカリの再建事例に注目し、その意味を内発的發展論の観点で説明する。

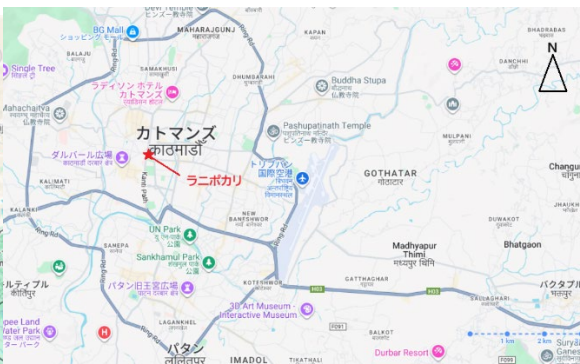


図1 本震と余震の震源位置 (筆者作成)<sup>1</sup>

図2 ラニポカリ位置 (筆者作成)

### 1.1 内発的發展論の概要と分析の方法

内発的發展論とは、地域の内発的な社会変動の事例を扱う学問であり、時代と共に変化する新しい社会的状況に地域の伝統が適応できなくなってきたときに、古い伝統を新しい状況に適応させて作り替える、そのような社会変化の過程を扱う学問として形成された。事例研究の際には、一定の発展のモデルに社会を当てはめて分析するのではなく、①地域を単位とし、②それぞれの地域の特徴にもとづいて、どのような伝統の作り換えが起こったのかに注意をする。そして、③そのような社会の変化に向き合う地域の人々が、互いに顔を合わせるような民際的關係性の中でどのように活動したのか、活動をした個人やキー・パースン<sup>2)</sup>に注目しつつ、④またその動機付けについても、何らかの宗教的な信念や、自然と共生するアニミズム的な思想があれば、それも考慮する。また、⑤地域の外部からの情報や新しい技術を必要に応じて取り入れるといったことを否定せず、外部との関わりにも注目しながら、地域の人々の内発的な動機付けによって、どのような伝統の作り換えがあったかをみる<sup>4)</sup>。

また社会変動の考察にあたって、何がどのように内発的に変化したのか、その要点を明確な形で示すことも必要になる。そのために、本稿では鶴見が内発的發展論の議論を深めるために参照している「萃点 (すいてん)」の概念を取り入れて考察を試みる<sup>5)</sup>。萃点の思想は、社会の中に様々な物事とその因果関係による関係性があることを前提に、それらの様々な物事がもっとも多く関連してあって集

<sup>1</sup> Google map を使用し、USGS<sup>6)</sup> の情報より作成 (図2も Google map 使用)

まっているポイントを萃点と呼んでおり，南方熊楠によって提起された観点である．図 3 には，多数の直線が乱れて交差し，また曲線も入り交じりながら，ある点では特に多くの線が交差して集結しているような様子が示されている．この点が萃点であり，地域にある社会関係や自然など万物の因果関係が入り乱れながらも，ある点では特に多くが集積している現象を示している．この図は南方曼荼羅と呼ばれており，その中に示される萃点（図中のイ）は，次の 3 つの要点で整理できると考えられる．

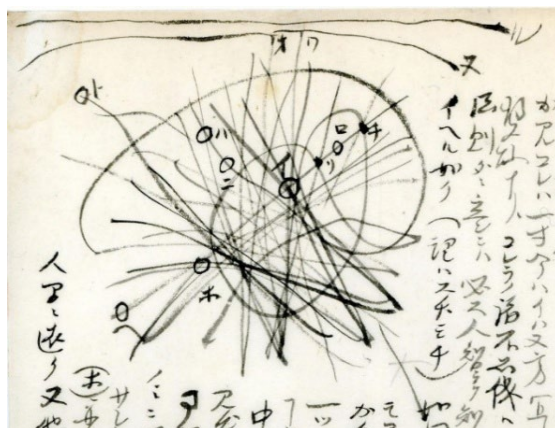


図 3 南方曼荼羅と萃点<sup>7)</sup>

図中には，多くの直線（因果・必然）と曲線が入り乱れているが，曲線は，因果・必然が偶発性の出来事による影響を受けて変動している様子を示していると考えられている<sup>8)</sup>．南方曼荼羅の獨創性は，偶発性の出来事が従来の因果系列に影響を与える<sup>2</sup>ことによる変動を指摘していることとされており，この点を本論でも考察する．分析の際に注目する 3 つの要点は，①社会変動をもたらした偶発性の出来事（本研究では地震がそれに該当する），②偶発性の出来事による因果関係の変化，③変化を受けて，萃点となって集結した事柄の内容の 3 つであり，これを事例から導出することで社会変動の要点を示すことを試みる．そこで次節より，事例の記述を行い，内発的發展論の観点からの考察につなげていく．萃点を社会変動の分析に活用する意義は，変化の中で何が焦点となったかを見つけ出し，萃点と考えられる事項にはどのような社会的要素が集結しているのかを意識的に考察する手がかりになるところであると考えられる．

## 2. ラニポカリ再建の経緯

本事例研究で考察するラニポカリは，ネパールのカトマンズの中心部にある，宗教的施設の名前である．ラニポカリの意味は，ラニ（Rani）が女王，ポカリ（Pokhari）が池を意味しており，中央に寺院があり，それを囲む池で構成されている．寺院は，1670 年ごろの創建とされており，当時の王の息子が

<sup>2</sup> 参考文献(5)南方（2015）では，南方による因果と縁起（偶発的な出来事）の解釈として「因はそれなくして果がおこらず．また，因異なればそれに伴って果も異なるもの，縁は 1 因果の継続中に他因果の竄入し来たるもの，それが多少の影響を加うときは起」と説明している．萃点についても「図中（イ）のごときは諸事理の萃点ゆえ，それをとると，いろいろの理を見出すに易く，はやい．」として，萃点を物事の集まる点と説明している．

象にひかれて亡くなり、王妃が深く嘆いたことを受けて、王妃を慰め子供を弔うために王が建てたものとされる。この寺院は今回の地震によって倒壊し、再建の必要があった。創建時には石やレンガなどで作られていたものであるが、地震を踏まえてどのように再建するかが問題となった。しかし、当初再建の責任を持っていたカトマンズ市役所は、寺院と池で出来たラニポカリをコンクリートを使用して再建し、さらに周囲を再開発して繁華な商業地区にする計画を打ち出していた。工事は、地震後 1 年に近づく 2016 年 1 月に開始されたが、住民がコンクリート施工の実態を発見し声を上げたことがきっかけとなって、抗議活動に展開した。住民側は、求めるべきはコンクリートや近代技術ではないと主張した（写真 3）。そして寺院や池は伝統的な方法で再建すべきものであり、聖地の周囲を商業施設にすることに反対であるとした。度重なる住民側の抗議の結果として、政府が住民の反対意見に応える形となり、2020 年 10 月になって伝統的な形式を守って再建が果たされたというのがラニポカリの再建事例の大きな流れである<sup>9),10)</sup>。



写真 1 地震前のラニポカリ（ドーム式）<sup>11)</sup>

写真 2 再建後のラニポカリ（シカーラ式）

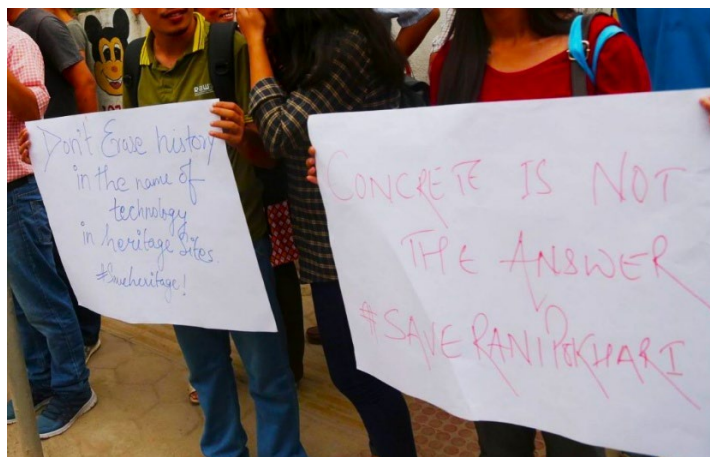


写真 3 抗議活動のプラカード<sup>3)</sup>

本研究は、ラニポカリの再建に別々の立場で関与した 4 名の関係者へ 2025 年 7 月 20～25 日にかけてヒアリングを行うことで分析と考察をしている。ヒアリングは、政府の考古局職員、遺産活動家、地

<sup>3)</sup> 抗議プラカードには、技術の名の下に遺産の場で歴史を消し去るな（左）、コンクリートは答えではない（右）と書かれている<sup>12)</sup>。

域住民代表者、政府復興庁<sup>4</sup>から寺院の設計を委託された建設コンサルタント会社職員の4名に対して行った。実施の形式は、半構造化インタビューにより行った。質問は、どのような人々が抗議活動に参加し、その動機付けがどのようなものだったと考えているかを軸にヒアリングした。それらを聞く中で、相手の回答内容に対応して冒頭 1.1 で示した内発的発展論の要件として①～⑤に関連する事項を質問する形で進め、その内容に該当するところを整理する方法を取った。次節で考察するとおり、本事例で重要と考えられる点は、第一に、池と寺院では別々の争点によって伝統の保存と再建に取り組みられたこと、第二に、再建のプロセスも伝統的な建設事業方式で行われたこと、第三は、地域が伝統の維持継承を基本として活動する組織を持っており、コミュニティにおいて都市の歴史性を守ろうとする意識や動機づけが共有されていることであると考えられた。

## 2.1 特徴 1：池と寺院の伝統的特性の保存

ラニポカリの再建では、池と寺院の再建の2つが別に分けられたことに一つの特徴がある。例えば池は、千年以上の歴史がある技術で作られている。それは、山から流れてくる地下水を計画的に誘導し都市全体の水利システムを構築するもので、カトマンズ盆地全体の都市計画の一部として、ラニポカリの池も水が周囲から流れ込むように設計されており、その水をさらに周辺地域に供給するシステムがあった<sup>13</sup>。池はレンガと、透水性の黒い土<sup>5</sup>によってできており、黒い土からは流れ込む水が染み出してくることで池には一年中水がある状態が維持されるという仕組みがあった。雨季には特に水が流れ込み、水分によって土が膨張して水の流出がしにくくなり貯水の効果を発揮する。冬になると、逆に土から水が透過しやすくなり、貯水していた水が乾期の間も都市に供給されるシステムがあった。このため、このような伝統的な仕組みをもつ池は、ネパールの歴史にとって保存しなければなら貴重な構造であるという人々の意思が強くあり、コンクリートによって埋め立てられ、水道水によって給水される方針に反対の声があがったのである。

一方で寺院の方には、造形上の形式の問題があった。それは、1670年頃の創建時に寺院はシカーラ様式というものだったのが、1833年に発生した地震<sup>6</sup>によって倒壊した後、当時のラナ政権により1851年になってドーム型へ変更して再建<sup>14</sup>されており、創建時とは異なった建物になっていたという事情を抱えていた（写真1）。100年以上経過した歴史的建造物は、創建時の形式で保存するという趣旨を示しているネパールの現行法<sup>15</sup>もあり、今回の再建ではこれを後ろ盾として、創建時の原型の形式に戻すかどうか争点となった。したがって、池はその構造上の仕組みが、寺院は造形上の形式が争点であり、それぞれに別の歴史と伝統の価値が保存される必要があったことが特徴であり、それぞれに抗議活動が展開された結果、政府は池と寺院の両方に対してコンクリートを使用した計画を撤回し、施工してしまった部分は撤去することとなった。池はコンクリートで固めて水道水を流し込むような形にしようとしていたのを、従来の透水性の土を使用した伝統的な水利システムを残す方向で決まり、寺院も地震前と同様のドーム型で再建しようとしていた計画を、創建時の形式で再建することとして

<sup>4</sup> 2015年12月に5年の期限で復興事業の所管を目的に設置された政府機関である National Reconstruction Authority（通称 NRA）のこと。1年の期間延長を含み、2021年12月に廃止された。

<sup>5</sup> Black cotton soil とされ、現地では Dyo cha（ネワール語）、Kali mati（ネパール語）。

<sup>6</sup> 1833年8月26日に発生したネパール大地震でマグニチュード7.7、震源はカトマンズ北東50Kmで発生したとされている<sup>16</sup>。

(写真 2), 周辺の再開発中止も含めて住民の希望に沿って再建が実現したのである。

## 2.2 特徴 2 : 伝統的再建システムによる再建

抗議活動の結果, 住民の意思が結実したのみならず, 今回の事例では再建のプロセスにおいて伝統的な仕組みが重視されたことにも大きな特徴が見られた。ネパールでは, 建設事業に競争入札ではない Amanat システムという仕組みが存在している。Amanat システムは, 伝統的な建設事業の仕方を意味し, 法律にも明文化されている<sup>17)</sup>。これは, 競争入札と異なって, 修復や建造したいものを, 単に安さの観点ではなく, 素材や技術の質を優先して建設する方法である。そのために, 建設しようとする建造物の価値や性質をよく知る技術者や地域の代表者などの関係者が利用者委員会という組織を設置し, 必要事項の議論や予算の決定などを行ったうえで, 建設に適任の技術者を選び, 技術者の希望を踏まえた適切な報酬を払い, 建設素材も適切な素材と技術で作ってもらう事業の実施方式である。ラニボカリの再建について, 地域住民の代表として利用者委員会委員を担当した A 氏に話を伺ったところ, 池の再建については池周辺地域の住民の代表者 5 名が利用者委員会に参加し, 復興庁と連携して Amanat システムで再建が行われた。この中で, 工事に関しては当時カトマンズ市とは別の地域であるバクタプル市が同様の仕組みを持つ池を再建中であったことから, 建設や技術の経験があり, 透水性の黒い土の取り扱いもできる技術者として遠方から職人を呼び寄せての再建が選択された。しかしこのように伝統の様式に従うことで人件費にも材料費にも費用が掛かる建設方式であるため, 実際には予算上の制約も発生していた。例えば水の浸透性と保水性が優れている土を使うにあたっては, 費用面で業者に加工を頼むことができなかった。これに対処するためラニボカリ寺院の建設業者から使用可能な設備を借り, 自分たちで土を捏ねるなどの工夫もし, 実情に合わせて柔軟な再建が行われたという。

一方で, 寺院の方は, 競争入札で建設業者を決めたものの, こちらも抗議活動を受けて伝統的な素材と技術で再建することが条件とされた。ただ 1670 年創建時の寺院がどのようなものだったか, 当時の正確な設計図がなく, 旅行者が遺した絵画以外に得られないことが争点となった。このことに関して, 設計図作成に参加したコンサルタント会社担当者 B 氏にヒアリングしたところ, 考古学者らによる発掘作業中に, 寺院の基礎部分から創建時の遺物と見られる装飾品が発見され, これが創建時の形式を示す根拠として役に立ったという。設計に当たっても, 絵画のみではなくカトマンズ盆地内の類似のシカーラ寺院のデザインを参照することができることや, 寺院の基礎に見られた以前の構造から寺院全体の比率を見いだせることから全体の設計につながり, 慎重に設計を進めることができたという。その結果, 伝統的な形式に基づく寺院の設計図については, 地域の人からそれ以上の抗議を受けることはなかったという。このように, 池についても寺院についても, 関係者それぞれに伝統を守ろうとする意識が共有されながら, また伝統的なプロセスも重視して再建が進められたことが大きな特徴となった。

## 2.3 特徴 3 : ネパールの社会ネットワーク

池と寺院, 周辺の商業施設化への抗議活動の発生と, 再建プロセスが住民の意思によって成し遂げられた背景について, 遺産活動家 C 氏へヒアリングしたところ, ネパール社会で歴史的に構築されてきた社会ネットワークやシステムが有効に生かされていることが分かった。

たとえば, 当初コンクリートによって池と寺院の基礎が施工されていることに気が付いた人物は, カトマンズ市の住民 D 氏であった。D 氏は地域活動家として知られ, 同じく遺産活動家であって普段

から情報メディア活用経験が豊富な C 氏など活動家に相談することで、SNS からの抗議活動の呼び掛けが速やかに実行された。具体的には、2016 年 8 月 24 日を皮切りに始まった抗議活動にあたって、Facebook からハッシュタグ#AngryPlanner による参加呼びかけが前日に始まり、併せて Save Heritage ページ<sup>12)</sup> が開設された。#Saveheritage や#SaveRanipokhari といったキーワードでも Facebook ほか Twitter (現 X) への投稿が連鎖的に行われ、百人規模の参加者が集まったといわれている<sup>10)</sup>。これら呼びかけ<sup>7)</sup>によって連帯が拡大した結果、例えば当時法学部生で参加した E 氏が法的な交渉を率先して影響力を発揮したなど、多くの人々の参画につながっていたという。また、C 氏へのヒアリングでは、他にも遺産活動家として連携した数名の名前もあり、活動家同士で連携できる関係を持っていることがうかがえた。次に、遺産の再建プロセスである Amanat システムのために立ち上げられた利用者委員会は、ラニポカリ周辺の 27 地区から、代表者 5 名が選出されたが、このメンバーは主にネワール族である。カトマンズ盆地の歴史的街は、主にネワール族によって建設されてきたといわれ、今でも旧市街を中心にネワール族が集住しておりカトマンズ市もその一つである。この地域では普段から地域の暮らしを維持継承するためのグループ活動が行われ、互いに関わり合いをもち、地域の代表者や信頼の厚い人などは域内で互いに知られており、今回の委員も選出されたという。また今回、池の再建に関わり、伝統的な技術を持つ職人の派遣元であるバクタプルもまたネワールの都市であり、また活動家の C 氏や D 氏、寺院を設計した B 氏もまたネワール族であった。つまり、都市の歴史的アイデンティティを共有した人々の間で活発な協力が行われていた。ただし、法的訴訟に尽力した E 氏など、現在のカトマンズ盆地にはネワール族以外も含めて様々な人々が暮らしており、歴史的都市の暮らしの豊かさを知る多くの人々はその価値を認識して協力している点も重要であり、ネワール族のみの協力関係に限定するものではなく、多様な住民の間で広く価値が共有されている点が重要である。さらに、一見利害が対立する政府関係者もカトマンズ盆地の暮らしを共有する人々である。政府考古局の職員 F 氏によると、当初は創建時の根拠資料として絵画のみしか参考にできず、そのためにシカーラ形式での再建に許可を出すことができなかったが、それはあくまでも根拠となる資料が不足していることによる行政手続的な問題であって、考古局としては資料が十分であれば住民の意思に対抗する立場ではなかったということであった。また当初コンクリート施工で周辺の商業化を計画していたカトマンズ市は、計画の担当部局が都市インフラ開発部局であり、セメントコンクリートを使用しつつも伝統的な池と寺院の空間を生かし、入場料を取って施設の維持のための収入源を確保しようと多様な必要に対応しようとしていたとみられる<sup>8)</sup>。このように、政府関係者も決してカトマンズ盆地の歴史的価値の不用意な改変自体に積極的な訳ではないことが分かる。したがって、伝統の維持継承に関わる暮らしの型となっている社会的ネットワークや、様々な人々の間で暮らしの価値が共有されていることによって、今回の抗議活動が効果的に展開されたということが出来る。

<sup>7)</sup> 端緒となった呼び掛けは、50 件のシェア記録 (2025 年 12 月 12 日現在) が残っており、「我々は建築物に対して受け身でいるわけにはいかない。建築物は言葉を発することができない。あなたがその声になるべきだ。」といったメッセージとともに集合日時等が投げられたものが C 氏によっても拡散されるなどして展開した<sup>18)</sup>。また、初日の活動は例えばネパールのオンラインニュースメディア MyRepublica などに取り上げられ<sup>19)</sup>、その後の活動の展開に寄与したものとみられる。

<sup>8)</sup> 担当部局に関しては現在、組織が変わっているものの、B 氏も指摘しており、ニュース記事からも組織の存在や入場料の計画があったことが確認できる。<sup>20), 21)</sup>

### 3. ラニポカリ再建の経緯の考察

ここで、本事例で記述した内容に基づき、内発的発展論の要件（1.1 で示した①～⑤）に該当する内容を抽出し整理をすることで内発的発展論が射程に置く事例に該当していることを確認したい。まず、①について、本事例はネパールの中でもカトマンズ市のラニポカリ周辺地域の事例を対象としており、地域の事例である。また、②伝統の作り変えの過程については、地震によって倒壊した寺院について、一度は1833年の地震後、創建時の形式からドーム式という別の形で再建されていたものを、今回の地震後には再度創建時の形式に戻したという意味で、伝統の作り変えの過程を示している。さらに池と寺院が地震後にコンクリート施工されたこと、それを撤去させて伝統的な手法に戻したという流れも、伝統の作り変えに関する抗争の具体的経過であるから、本事例は伝統の更新や作り変えの過程を示している。つづいて、そのような動きの中で③抗議活動などの動きに参画していた人々が、互いに顔を合わせるような民際的な関係性の中で活動していたかという点については、例えばラニポカリのコンクリート施工を発見した地域活動家 D 氏は遺産愛好家 C 氏に相談して抗議活動に展開し、また実際の再建で利用者委員会の委員となった A 氏はラニポカリ周辺地域のコミュニティの有力者として知られる中で選出されるなど地域の顔が見える関係が見られた。抗議活動の中で参加した学生 E 氏などその後顔を突き合わせるメンバーが増えていく過程も見受けることができ、全体として人々が固有名詞で接する関係性が基盤にあった。そして、④動機づけの側面の宗教性やアニミズム的価値観の側面については、本事例は宗教建造物再建にかかる事例であることから、その寺院を創建時の原型に戻そうとすることは、その宗教性に対しての信念を示していることになる。また、池の構造をコンクリートによって破壊しないとする考えは、カトマンズ盆地の都市の伝統的水利システム保存の意識の表れであるが、それは高地から盆地へ流れ来る伏流水と盆地の都市計画との間で構築された自然との関係であり歴史的関係である。自然との共生の形態でもあるこのシステムを保存する動機づけはアニミズムとつながる要素を持つといえる。最後に、抗議活動の展開において影響を与えた⑤外部との関わりという点では、本事例は現代の最新技術である SNS 活用をそれと考える。抗議活動に百人規模の参加者が集まったことは、以前にはなかった外部からの技術を取り入れたことが効果的に影響したことを示している。

以上の整理から、本事例は内発的発展と言うべき内容を備えていることが分かり、内発的発展論が意図する再建過程の実践事例であったことが論証できる。

このことを踏まえて、次に本事例における社会変動の特性を 1.1 で整理した萃点の観点から考察する。ラニポカリ再建における変化として明らかなのは、池は伝統の形式を維持したこと、および寺院は創建時の形式に戻したこと、である。変化という意味では、寺院は目に見える形での変化であるが、池については地震前と同じであるところが異なる。ただ、そこに共通しているのは、どちらも当初はコンクリートを使用した再建計画があり、それに抗議し撤回させた点が共通している。その内容が意味するのは、現代に特徴的なセメントコンクリートを基礎とした都市開発的な再建計画が、カトマンズの伝統的建造物再建には適切ではないという住民の意思が示されたことであり、時代の流れにそのまま従うことはできないというカトマンズの歴史都市の強固な価値を示しているといえる。そしてこれらの動きを後押ししたのものとして SNS などの情報メディアがあり、表現の自由が生かされた時代性だったことが、声を上げて多くの人を巻き込むのに貢献したことがある。これらを踏まえると、まず萃点

の要件として①偶発性の出来事とは地震である。これによって生じた②因果の変化を整理すると、伝統的建造物の再建の必要が生じたことが社会変動の契機をもたらした要因といえる。そこへ、伝統的な工法で作られた建造物という従来から存在した因に、セメントコンクリートによる現代的な都市開発の因とが交差する形となったといえる。これに対して、歴史的な都市で暮らし、伝統を維持する基盤を持った地域の人々の価値観という従来から存在する因が接触し、言論の自由な環境と SNS といったメディアという現代的な要因が触媒となったことで、近代技術へは反対とする意思が表明され抗議活動という一つの結果を引き出したものといえる。これにより、伝統の維持という最終的な結果が導かれたものとして説明できるのではないだろうか。この場合、③萃点は何だったかと考えると、ラニポカリそのものではなく、むしろ伝統を守ろうとする価値観であったと本論では考察する。それは、今回の地震で再建が必要になった伝統的建造物では、ラニポカリ以外にもセメントコンクリートを拒否して伝統的工法による再建がなされた事例が見られるからである<sup>9</sup>。また、一方では SNS や情報メディアをうまく利用し、一方では土木建築分野で現代的潮流であるセメントコンクリートによる開発へ反対したという形で、現代という時代性を一方ではうまく利用し、一方では反対するという形で、必要に応じて異なった向き合い方を実践したところは、伝統と近代に対する住民の柔軟な適応を示しており、今回の再建の動きは単に近代を否定するだけではないことも理解できる。このことから、1章1節の萃点の要素を本事例の考察に沿って次の様に整理した。

[① 社会変動をもたらした偶発性の出来事]

ネパールゴルカ地震。

[② 偶発性の出来事による因果の変化]

伝統的建造物の再建という変化の契機の発生により、池と寺院を、政府がセメントコンクリートを使用して再建しようとしたことと、伝統的形式の維持という課題の浮上、それに対してネパールの伝統を守ろうとする人々の意識とそれを支える社会的ネットワークが基盤となって、SNS やインターネットを含む新しい時代の情報メディアの技術が加わることによって、伝統を重視した再建を望む意思表示が展開し、実現したこと。

[③ 萃点]

地域活動家、遺産活動家、利用者委員会委員や設計担当者、技術者や法律家などのキー・パーソンを含む地域社会の様々な人と、それらの人々が共有する伝統文化を維持継承しようとする価値観。

萃点の地震前後の変動を考えるならば、ネパールの社会には地震の前から地域活動をし、伝統を維持継承しようとするコミュニティや、共通の意識は変わらず存在していた。しかし、地震の以前は、人々に伝統を守ろうとする意識が結集するような契機がないときには、その意識が萃点として目的を達することは必ずしもなかったといえる。その証左として地震前のラニポカリの寺院は、1833年の地震後に破壊し1851年にドーム型に形を変えて再建されて以降、今回の再建まで創建時の姿に戻ることなく維持されていたからである。その背景として、1800年代から1951年まで続いたラナ専制政治時代、表現の自由が許されておらず、このことが住民の声が上げられなかった背景だとヒア

---

<sup>9</sup> 例えば、カトマンズを代表する建築物の一つである Kasthanandap も同様で、多数の事例がある。

リング中に共通の意見として聞かれた。その後この半世紀近くは、全国的には伝統的な景観の保存よりも、セメントコンクリートによる都市開発の勢いが強く、これがカトマンズ盆地の歴史的景観を劇的に変化させていた。つまり地震前までは、セメントコンクリートによる経済開発、都市開発こそがカトマンズ盆地の変化の萃点となっていたという事もでき、これが地震直後にラニポカリ周辺を商業開発する計画として表出する背景要因だったともいえる。しかし、地震によって建築物の再建という契機が生まれると、伝統を守ろうという従来からの住民意識が現代の自由な言論環境を土台に情報メディアによる情報環境などが触媒となって集結したことで、伝統文化を重視する価値観が萃点となって結果に結びついたということができると考えられる。それを示すような地震後の持続的変化として、2025年現在、カトマンズ市内では、路面のバス停などが簡易な屋根付きの鉄骨タイプから精巧な彫刻を施した伝統的な木造の東屋の形式へ作り換えが進んでいるのである。これは地震後のこうした活動によって、近代技術による都市開発から伝統を再興しようとする潮流へと社会を動かす萃点に変動が起こっている可能性として指摘できる。

#### 4. 結論と今後の課題

ラニポカリの事例を内発的發展論および萃点の観点で分析した結果、ネパールゴルカ地震という偶発的な出来事をきっかけとして、従来から存在していたネパールの地域の伝統を守る暮らしの型とそれによる人々の意識が、近代の特徴である情報メディアを触媒として結集することで、同じく近代の特徴としてのセメントコンクリートによる再建に抗う内発的な力となって、建造物の伝統的な形式を重んじた再建に成功したことを示すことができた。

しかし課題として、今回人々を集結させる重要な触媒となった情報メディアが、実際にどれほど必要だったかは明確ではない。ネパールの地域コミュニティの結束力は、むしろ日ごろからの密な活動によってできており、近代的な情報メディアがなくても内発的に結集する力があると推察される。今回の再建で、SNSなどの情報メディアが効果を発揮したことは事実であるが、それがネパール社会の結束にもたらしている影響の度合いに関する考察は、今後、本考察に付加するべき課題の一つである。

また、萃点の思想を適用して内発的發展論の社会変動を考察するという方法についても、今後より議論を深めていく必要がある。例えば今回は萃点を地域の人々の共通の価値観が集結したものとして捉えたが、萃点を捉える視覚も多様でありうる。例えば地域の萃点を議論するなど場所を対象とすることもあるだろう。本稿の取り組みをさらに深めて萃点の研究の進展につなげることも必要であり、災害を含む急激な社会変動の前後を考察し、地域の人々にとって内発的な復興・変化へつなげていけるような観点として役立てていくことが課題である。

#### 5. 謝辞・参考文献

##### 謝辞

本研究の調査にご協力いただいた、ネパール政府考古局職員、コンサルタント会社職員、遺産活動家、コミュニティの代表者（利用者委員会委員）、バクタプル職員の方に感謝申し上げます。また、別の遺産再建事例の調査研究をされ、本調査に有益な助言をくださった Rija Joshi 氏に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 石井溥：日本におけるネパール・イメージと科学研究費等による研究，異文化研究，第1巻，pp. 1-15, 2007.
- 2) Nistha Joshi: Impact of Restoration of Physical Infrastructure in Nepal's Cultural Historic Ponds on the Community, ICEE-PDRP 2023 conference paper, pp. 384-388, 2023.
- 3) Bhawana KC, Digby Race: Outmigration and Land-Use Change: A Case Study from the Middle Hills of Nepal, Land, Vol. 9, No. 1, article. 2, pp. 1-19, 2020. DOI: 10.3390/land9010002
- 4) 鶴見和子：内発的発展論の展開，筑摩書房，340 pp., 1996.
- 5) 南方熊楠：南方マンダラ（新装版初版），河出書房新社，390 pp., 2015.
- 6) USGS Website: [https://earthquake.usgs.gov/earthquakes/eventpage/us20002926/executive/\(2025-06-03access\)](https://earthquake.usgs.gov/earthquakes/eventpage/us20002926/executive/(2025-06-03access))
- 7) 南方熊楠顕彰館：土宜法龍宛書簡（南方マンダラほか），2006©.  
[https://www.minakata.org/facility/collections/minakatamandala/\(参照2025-07-03\)](https://www.minakata.org/facility/collections/minakatamandala/(参照2025-07-03))
- 8) 鶴見和子：南方熊楠・萃点の思想-未来のパラダイム転換に向けて(第2版)，藤原書店，190 pp., 2001.
- 9) Sanjaya Uprety and Barsha Shrestha: Role of Heritage Activism in Post-Disaster Reconstruction, Journal of Disaster Research, Vol.16, No.2, pp.194-200, 2021.
- 10) OnlineKhabar: Ranipokhari reconstruction in retrospect: 4 years of disputes followed by 1.5 years of deeds, 2020. [https://english.onlinekhabar.com/ranipokhari-reconstruction-in-retrospection-4-years-of-disputes-followed-by-1-5-years-of-deeds.html/\(2025-06-03access\)](https://english.onlinekhabar.com/ranipokhari-reconstruction-in-retrospection-4-years-of-disputes-followed-by-1-5-years-of-deeds.html/(2025-06-03access))
- 11) Nepali Times: Building back Rani Pokhari even better, 2020. [https://nepalitimes.com/banner/building-back-rani-pokhari-even-better/\(2025-09-12access\)](https://nepalitimes.com/banner/building-back-rani-pokhari-even-better/(2025-09-12access))
- 12) SaveHeritage: facebook account post, 2016.  
[https://www.facebook.com/savenepaliheritage/photos/pb.100064623674346.-2207520000/1017037211751104/?type=3/\(2025-06-03access\)](https://www.facebook.com/savenepaliheritage/photos/pb.100064623674346.-2207520000/1017037211751104/?type=3/(2025-06-03access)).
- 13) Padma Sundar Jyoshi: PONDS—Traditional water management system of Kathmandu Valley: Challenges and opportunities, UNHABITAT progress report, 2014.  
[https://www.unescap.org/sites/default/files/1.%20PB%20Joshi,%20UN%20HABITAT%20Traditional%20pond%20mangement%20in%20KV.pdf/\(2025-06-03access\)](https://www.unescap.org/sites/default/files/1.%20PB%20Joshi,%20UN%20HABITAT%20Traditional%20pond%20mangement%20in%20KV.pdf/(2025-06-03access))
- 14) दामोदर न्यौपाने : सम्पदा लडाईं, Sangrila books, ५११ pp., २०७६.(資料情報邦訳：ダモダール・ネウパネ：遺産を巡る闘い, シヤングリヤ書店, 511 pp., 2019.)
- 15) Nepal Government: Ancient Monument Preservation Act, 2013 (1956A.D.), 1956.  
[https://media.unesco.org/sites/default/files/webform/mhm001/np\\_actancmomsarchaeohitart1956\\_engorof\\_neporof.pdf/\(2025-10-10access\)](https://media.unesco.org/sites/default/files/webform/mhm001/np_actancmomsarchaeohitart1956_engorof_neporof.pdf/(2025-10-10access))
- 16) तारानिधि भट्टराई, निमानन्द रिजाल, किशोर थापा: बहतर सालको भुकम्प, पब्लिकेसन नेपा~लय. ४०६ pp., २०२३.(書籍情報邦訳：バツタライ・タラニディ, リジヤル・ニマナンダ, タパ・キシヨール: 2015年の地震, ネパラヤ出版, 406 pp., 2023.)
- 17) नेपाल सरकार: सार्वजनिक खरिद नियमावली, २०६४. (資料情報邦訳：ネパール政府：公共購入規則, 2007.), . [https://www.mopit.gov.np/rules/public-procurement-rules-nepali\\_1558855225.pdf/\(2025-09-12access\)](https://www.mopit.gov.np/rules/public-procurement-rules-nepali_1558855225.pdf/(2025-09-12access))
- 18) SaveHeritage: facebook account post(Alok Tuladhar's post), 2016.  
[https://www.facebook.com/alokstuladhar/posts/pfbid0r6g8YEDebdp98Lw2qfySwg9jCkSx2YwL1AqtxR62ZaYwnUGRXR1vReboRHq1PeFZl/\(2025-12-05access\)](https://www.facebook.com/alokstuladhar/posts/pfbid0r6g8YEDebdp98Lw2qfySwg9jCkSx2YwL1AqtxR62ZaYwnUGRXR1vReboRHq1PeFZl/(2025-12-05access)).
- 19) MyRepublica: Ranipokhari temple restoration breaches archeological norms: Activists, 2020.  
[https://myrepublica.nagariknetwork.com/news/ranipokhari-temple-restoration-breaches-archeological-norms/\(2025-12-11access\)](https://myrepublica.nagariknetwork.com/news/ranipokhari-temple-restoration-breaches-archeological-norms/(2025-12-11access)).
- 20) The Kathmandu Post: Reconstruction of Rani Pokhari likely to be delayed, 2017.  
[https://kathmandupost.com/valley/2017/12/20/concrete-wall-around-rani-pokhari-draws-flak/\(2025-12-11access\)](https://kathmandupost.com/valley/2017/12/20/concrete-wall-around-rani-pokhari-draws-flak/(2025-12-11access)).
- 21) Himalayan News Service: Reconstruction of Rani Pokhari likely to be delayed, 2017.  
[https://thehimalayantimes.com/kathmandu/reconstruction-rani-pokhari-likely-delayed/\(2025-12-11access\)](https://thehimalayantimes.com/kathmandu/reconstruction-rani-pokhari-likely-delayed/(2025-12-11access)).

Paper

## **Considering on the reconstruction and recovery process following the 2015 Gorkha earthquake in Nepal from the perspective of endogenous development theory**

Anju Yonekawa<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Research Strategy Center, Hyogo Earthquake Memorial 21 Century Research Institute, Chief Researcher

### **Abstract**

This paper examines the reconstruction and recovery process following the 2015 Gorkha earthquake in Nepal through the lens of endogenous development theory proposed by Japanese sociologist Kazuko Tsurumi, and attempts to explain the endogenous motivation during the reconstruction of Nepalese people. Currently, in disaster recovery, it is important for local residents to actively participate in the reconstruction process. Regarding local people's initiative, this paper examines the reconstruction process of Rani Pokhari, a traditional Nepalese water conservation facility with a temple at the center, as an example. While the government initially planned to use modern technology for reconstruction, residents actively sought to preserve the tradition and historic value of it. As a result, the initial plan was revoked and people's opinion was adopted and the temple structure along with the pond was successfully rebuilt in traditional style. This reconstruction process reveals that Nepal has a lifestyle that seeks to preserve heritage tradition, and that local community activity fosters a shared awareness among the people. This shared awareness, combined with modern social media, led to the successful reconstruction using traditional methods rather than the use of modern technology.

Keywords: Nepal Gorkha earthquake, Reconstruction, Ranipokhari, Endogenous development theory, Social change, Suiten